

## リハチヨフ書簡集

平成7年の4月、ゼミ生である川代，大西，小林さんの3人は，ゴールデンウィーク明けまではコンピュータでロシア語と日本語を処理する方法とか，ロシア市場でいかに電子産業がさかんになっているかなどを帰国までもない先生から聞いていた。

そのあと何かをちょっとやったのだが，ひょんなことから手に入れた「リハチヨフ書簡集」に取りかかることにした。ことの始まりはたいてい，たわいない。これもそうだった。

年度末にみんなでまとめた書簡集第1は，『おじいちゃんのつぶやき』と銘打っている。だいたい近頃の若者ときたら，というせりふは，人類の歴史と同じ古さをもつといわれている。それにあやかっただけではない。私たちは，少なくとも親しみと敬意をこめて，そう名付けた。九十のよわいを数えてもなお，第一線で活躍するロシアの文芸学者に尊敬を超えるなにかを感じる。そして言うことがまた，ふるっている。

私たちは，自己鍛錬の方法として大学でロシア語を学んだとか，実務的な技量向上に資するとしてロシア語に励んだだけではなかった。ほんとうの人間として，ほんものの理性として，リハチヨフのような人物に会えたことをロシア語学習の宝にしてもよいと思っている。

そんなリハチヨフの書簡第2集である。

## 第16書簡 旅にしよう

人生の最大の楽しみは、自分の国やよその国を旅することだ。それにしても、旅行を楽しむものと面白くないものに、訪れた土地を名所と人知れぬところに分けへだてするのは十分に注意するように。君たちの訪れた土地のランク付けなどはやらない方がいい。それよりは、準備の整っていた旅行と準備のなかった、準備のまずかった旅行に分けてごらんなさい。どんな町でも、どんな国でも、どんな場所にせよ旅行の準備が整わなかったところは、興味がわかず、面白くないものなのです。そして逆に、訪問地の歴史を知っていれば、興味は何倍にも増してくるのです。



まだ訪れたことのない町、見知らぬ町の旅行に備えるとは、いったいどういうことなのだろうか。それはその歴史を調べ、旅行用のガイドマップでもいいから町の見取りを知り、必見の観光箇所を地図の中に目印をつけ、時間を無駄にしないように、おおよその道順を決めておくことである。



面白くなさそうな場所であっても何かおもしろいものを見つけるチャンスを逃さないように。この地上にはおもしろくないところなど一つもないのだから。くそ面白くもない人々とか、おもしろいことを見いだせずにいる人々、中身のからっぽな人たちがいるだけなのだから。

せっかく初めての場所にやってきたというのに、「ぼくあね～、いつだったか、パリに行ったことがあってさ。パリじゃああだ、こうだ」と退屈そうに仲間としゃべりだす奴は、いつみても虫が好かんものです。運命の導きによってそこに行ったのだから、その雰囲気に合わせてくれるくらいの気持ちをもたなくちゃいけないし、いつだって自分なりの、自分だけの、他人にはないものを見いだすくらいでなきゃならない。この能力は、望みさえすればかなうというものでなく、それ相当の知識を伴うものなのだ。旅行に先立つ予備知識がとくに大切である。

その点で芸術家の印象記は、どんな時も興味が尽きない。彼らの旅行記や印象記を読んでみたまえ。なぜだかはわからないが、芸術家というものはいづれも、驚くほど立派な文章を綴るものである。コロヴィン、ベヌア、ドブジンスキなどはすばらしい書き手である。

じっくり見つめ、ながめ、それから絵画にだけでなく、手記にも見たものを刻む能力には、ただただ感銘するしかない。

ドブジンスキが回想録に書いているが、初めて訪れたミュンヘン、ヴェニス、パリが若かりし頃の彼にどれほどの大きな印象を与えたことだろうか。ところが彼らは、ロシアに突如として戻らざるをえなくなったのだ。夫妻の幼息子を外国で突然亡くしてしまい、故郷のヴィリニウスに埋葬することにしたためである。ミュンヘン、パリ、ヴェニスの果てに、彼はリトワニアの小さな墓地にたたずむ。そこでこう書くのである。

私は妻とともに、街道を馬車に揺られながら、森を抜けたり、草原伝いにネマン方面に進むのであった。そうすると、もの悲しくも、なつかしいリトワニアの景色が再び見えてくる。砂地の草原、その中に緑のオアシスのように、高い十字架と松の木が天を指すロマンチックな墓地、灰色の秋空、ゆったりと飛ぶ一羽のからす。

こうした墓場や彫刻をほどこされたリトワニア風の十字架、地平線に延びる森の茂み、赤く古びた木造のカトリック寺院が立つやせた土地。そこがオリトゥだ。私がミュンヘンに行く前から知っていて、愛してはいたけど、外国で見てきたものを振り返る今となっては、この一角が私には一種独特の感が迫ってくるのだ。

私がかつてヴィリノに滞在したことがあっても、この愛着ある町ペテルブルグには、またもや引き寄せられてしまう。この先も外国旅行を終えるたびに中継地点としてペテルブルグに立ち寄ると思うが、そのたびに、ほれぼれするような、絢爛豪華なヴィリノとここの品定めをやってしまいそうだ。

これこそ筋金入りの知識人が、旅の果てに得る本当の印象である。前にも書いてくり返しになるが、内面の豊かな人間にとっては環境全体もとことん豊かなのである。



もうひとつ。旅行は定住、精神的な定住、故郷に対する愛情を育むものである。

新しい町にたどり着いて、高名な芸術作品や有名な風景をながめるときも、読んだり聞いたりしたことや「耳にタコが寄る」ほど言い古されてきたことには惑わされないこと。書物から得たことの多くは、実際に見たものの美しさや価値を理解する手助けになると思うが、ことと次第によっては君たち一人一人の、自分なりの印象を損なう可能性も残される。自分の気持ちを大切にしてください。そんな機会に恵まれたら、真摯な気持ちで評価を下し、またいかなるものにせよ穏当な見方に逆らおうとしてはいけない。この傾向は、自尊心の強い人々によく見受けられる。

印象記の一例を挙げてみよう。気に入れば、うなずいてくれればいいし、そうでなくてもよい。私はペテルブルグの年老いた住人。生まれたのもここペテルブルグ。私の両親、そのまた親たちもここで生まれた。18世紀以来、先祖代々ペテルブルグに住んでいる。

子どもの頃からネヴァ河の美しさにはいつも心ひかれてきた。ネヴァ河の中央部は、どんなにかとうとうとしていることか。ネヴァ河にはラドガ湖の砕氷が陸続と流れ、ペトロパブロフスク要塞の尖塔が町に絢爛さを与え、要塞の大砲が撃ちだす、きっかり12時の、伝統的な正午の号砲がみごとだった。

ネヴァ河のもっとも広がっている中央部が美しいことは、異論の余地がない。だが何故かこの中央部が私には寂しさを呼び起こすのである。ここはこの町の景色の中でももの悲しくも、寂しい場所だ。冬宮運河からペトロパブロフスク要塞方向を見たときには特に。寂しさで胸がしめつけられそうだ。もしかすると、私は子どもの頃から要塞に囚われた人のことを聞いていて、押し寄せる洪水に牢獄で溺れ死んだタラカノワ王女の恐ろしい伝説が、幼少の私に特別の影を落としているのかもしれない。世界でもっとも美しい春の流氷も、生きとし生けるものの哀れさを思わせるのだろうか。



ペテルブルグでは運河という、もっととっておきの場所がある。これほどすばらしい一角、開けた一角ほど美しい場所があるだろうか。プーシキン最後のアパート近くにあるモイカ運河、グリフ像のある橋がかかるグリボエドフ運河、チャヴァキンスキイが海神ニコラにとりつけた半鐘を思わせるクリューコフ運河、そしてフォンタンカ運河。市内の名所は他にニュー・オランダとデラモト水門（関門とも言いたくなるようなもの）があり、かつては引き込み水路から品物が倉庫に運び込まれるのだった。私が特に好きなのはグリボエドフ運河で、整然と区画された街路に、ちょうどローマ字のエスを思わせる曲線を描いている。前方に目をやると、すばらしい橋のかかった運河だ。運河は

紋切り型の街路図に活気と無秩序をもたらし、ドストエフスキがこうした街路を「罪と罰」で設定したというのもあるが、偶然のことではあるまい。ラスコリニコフの推理は、人生をとんでもないものに位置づけてしまったけど、本当のところ人生は彼なんかにはお構いなしに流れているものなのだ。運河の水は、人生が流れる如くに流れている。運河、ドストエフスキの名付けでは下水路、は整然とした、ひどく陳腐的な街路区画を「流し去る」のであった。グリボエドフ、モイカ、クルシュタイン運河を端から端まで歩いてごらん。モスクワなら古いアルバート通り、シヴェツ、ヴラジエク、クロボトキン通りをずっと歩いてごらん。



町はまさざまな思いをかき立てる。そんな思いをかき立てるのは、オリョールの町。ツルゲーネフの「貴族の巢」の舞台になり、レスコフの「不死身の首領」という名作の主人公が住んでいたオルリク河が流れる。ボルガ河沿岸の町の手入れの行き届いた並木道のこと。ウリヤーノフスクやヤロスラブリ、コストロマ、ゴーリキ、その他たくさんの町。私たちがオストロフスキやゴーリキ、ゴンチャロフと一緒に考えさせられような錯覚におちないだろうか。

旅先はたくさんのものを広げて見せてくれるし、たくさんのことを考えさせたり、夢見させてくれるのだ。

## 18通目 芸術を理解すること

そんなわけで人生とは、人間が持っているもののの中で最も価値がある。人生を豪華な宮殿にたとえてみよう。そこにはたくさんの広間が、果てしなく続いている。それらは色とりどりで、似ている部屋はひとつもない。この宮殿の中で一番大きな広間は、正真正銘の「玉座の間」であり、芸術がそこに君臨している。これはまた、不思議な魔法の広間でもある。それが最初にかかる魔法には、その持ち主だけではなく、祝典でそこに招かれた人みんなもかかって

しまう。

これは終わりのない祝典の広間で、人の生涯を魅力に溢れ、厳かで、楽しく、意義あるものにしてくれる。芸術や芸術作品、芸術が人の人生の中で演じている役割を前にして、どのようなことばでこの感激を表現したらよいのか、私はわからない。芸術が人間に与えてくれる最も大きな価値は、善の価値である。芸術を理解する能力を授けられた人は、精神的により良く、つまりもっと幸せになることができる。そう、幸せにだ。なぜなら芸術を介して世界や自分を取り巻いている人々、過去や遠くを好意的に理解する能力を手に入れた人は、他人や異文化、他の民族と簡単に仲良くなることできるからだ。その人にとって生きるのは、いともたやすいことなのだ。



マイミンは高学年生のための本「芸術はイメージで考える」の中で、このように書いている。「芸術の力を借りて私たちがしている発見は、生き生きとして、強い印象があるばかりでなく、有益なものでもある。芸術を通して現れる実際の知識は、人間味ある気持ちや思いやりによって温められた知識である。この芸術の特性は、それを無限の道徳的な価値として社会に登場させてくれる。ゴーゴリは演劇についてこう書いている。「演劇は、これを使って善の世界の多くを語ることができる講座のようなものだ。」あらゆる真の芸術は、善の源泉である。芸術は、基本的に道徳的なものである。なぜなら読者や観衆、芸術を受け入れるすべての人々に共通体験、あらゆる人間に対する思いやりの気持ちを呼び起こすからである。文豪トルストイは、芸術の「統一されている出発点」について書いたことがあったが、その性質に最も重要な意味をつけ加えている。芸術は、比喩的な外見を持っているがゆえに、最良の方法で人を人間性に触れさせてくれる。つまり注意深く、理解を示しながら、他人の痛みや喜びに接するようにさせてくれるのだ。芸術は他人の痛みや喜びを十中八九自分のものにさせてしまう。奥深い意味で芸術は人間的である。それは人から発し、人へ、生命あるもの、善良なものへ、人の中の最良なものへと導いてくれる。それは人間の心の団結に奉仕している」。ワンダフル、すばらしい！ここでは一連の考え方が、この上ないほどの格言のように響いてくる。

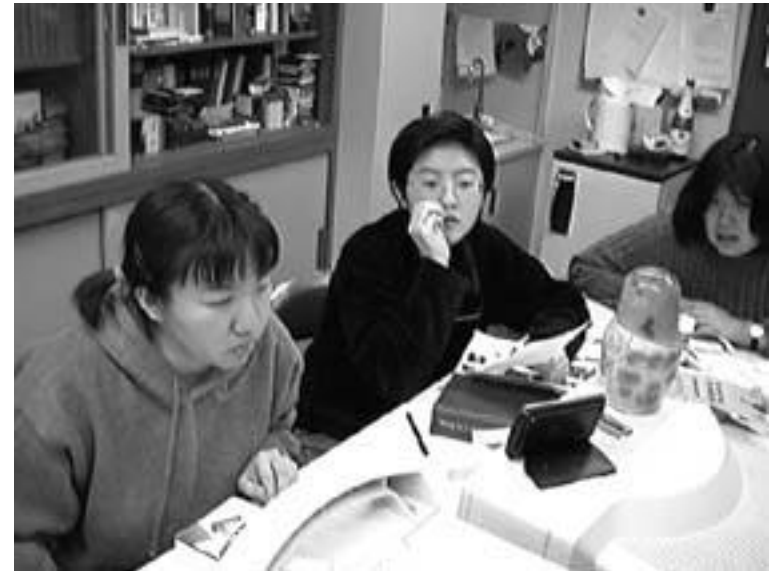
芸術作品の理解が人に与えてくれる豊かさを、人から奪

い取ることはいできない。それは至るところにあって、それをしっかりと見つめるべきである。

人の中に存在する悪は常に、他人の無理解、ひどい妬みやもっと深刻な場合には敵意、社会における自分の立場に対する不平不満、人を苦しめる永遠の憎悪や人生の絶望と結びついている。悪意ある人は、自分自身を自分の悪意で苦しめている。暗黒の中に何よりも自分を沈めているのである。

芸術は周りを明るくすると同時に、人間の人生を神聖なものにしてくれる。繰り返しになるが、芸術は人を善良に、つまり幸せにするのだ。

しかし芸術を理解するということは、ぜんぜんた易いことではない。長い間、一生涯それを学ばなければならないのだ。自分の芸術の理解を広げようとするときに、中断があってはならないからである。それは後ろに引き下がるバック、無理解の闇に向かう後退があるのみである。芸術は、いつでも私たちに新しいものにめぐり合わせてくれる。そんなところに芸術の気前よさがある。私たちに向かって宮殿の最初の扉が開くと、それに続いて次の扉が待っている。



どのように芸術の理解を学ぶべきか。どんな風にしてこの理解を向上させるべきか。どのような性質が必要とされるのか。

処方箋を出そうとは思わない。断言するつもりもない。だが芸術を本当に理解するために最も重要だ、と思われる特質は、誠実さや正直さ、芸術の知覚に対する発見にある。

まず自分自身から、自分の誠実さから芸術の理解を学ぶべきである。

よく「あの人には生まれつきのセンスがある」などと言われることがあるが、実はそうではない。美的センスがあると言われる人をよく見てみれば、ひとつの共通した特徴

があるのに気づく。その人たちは、心底から正直で、自分の感受性に対して率直なのである。そこから彼らは、多くのことを学んでいるのだ。美的センスが遺伝で伝わるとは思えない。私が思うには、美的センスは遺伝子で伝わる性質には数えられない。とは言っても、家庭は美的センスを育てているし、多くのことは家族やその知性に左右されている。

定説や流行、友人の意見に基づいたり、敵の見解に反対したり、先入観によって芸術作品に接してはいけません。芸術作品とは「一対一で」いられなければならない。

芸術作品をわかろうとするとき、流行や他人の意見に流されたり、優雅だとか「洗練されている」ように見られたいと考えだしたら、君たちは自分の中で人生が芸術に、また芸術が人生に与えてくれる喜びを押しつぶしてしまうことになりかねない。

理解できないことを理解したふりをするならば、他人ではなく、自分自身を欺くことになる。何かがわかったと自分に納得させようとしているだけで、芸術が与えてくれる喜びというものは、あらゆる喜びと同じように自然なものである。

好きなものは、好きと言ってみてください。ただ自分が理解できても、できなくても、それを他人に押しつけてはいけません。完璧な学識と同じように、完全な美的センスを持ちあわせているとうぬぼれてはいけません。完全な美的センスは、芸術においてとうてい不可能だし、完璧な学識は、学問においてはありえないからです。自分や他の人

の芸術に対する態度を尊重して、美的感覚については議論されない、つまり云々いわないのだ、ということ覚えておいてください。

このことは、完全に自分の殻に閉じこもり、自分やあれこれの芸術作品に対する自分の態度に満足しなければならないことを意味すると思いますか。「これは好きだけど、それは気に入らない」、これでおしまいだ。いや、違います。決してそうではありません！

芸術作品に対して自分のポジションにとどまっているのではなく、理解できないことを理解しようと努めたり、でなければ部分的に理解できたことでも、理解を深めようとするべきである。芸術作品の理解は、常に不完全さがつきまとう。本当の芸術作品の豊かさは、汲めども「尽きることがない」からだ。

すでに述べたように、他人の意見に傾いてはならないが、耳を傾け、それを考慮に入れるようにすべきである。多くの人が芸術作品について意見が否定的ならば、たいていはあまり面白いものにならない。面白いのは、たくさんの人が肯定的な意見をのべているときである。何千もの人々がある芸術家や芸術の流派を理解しているというのに、皆は間違っていて、正しいのは自分だけだと言い切るのは、あきらかに思い上がりだろう。

もちろん美的感覚は議論されないが、それは自分の中でも、他人の中でも培われているのだ。他人が理解していることを理解しようとすることは、可能である。理解してい



る人が多い時は、なおさらだ。多くの人が気に入っていると言っていたり、画家や作曲家、詩人や彫刻家が世界的に絶大な定評を被っているなら、その人たちは単なるペテン師ではありえない。とはいえ流行はあるし、新しいもの、または異質なものを認めない風潮もある。「よそのもの」やあまりに難解なものなどに対する嫌悪感が、伝染することもある。

大切なのは、始めの簡単なことが理解できないのに、複雑なことをすぐさま理解することはできない、という点に絞られる。学問であれ芸術であれ、それぞれを理解する時に、段階をとばしてはいけないのだ。クラシック音楽を理解するためには、音楽芸術の基礎知識が必要だ。初等数学を知らずに、高等数学をマスターすることはできない。

芸術に対する態度でみえる誠実さは、芸術の理解のための前提条件だが、これがすべてではないのだ。芸術の理解のためにはさらに知識が必要とされる。芸術の沿革や遺物の歴史に関する実際の知識や創作者についての伝記は、芸術に対する美的な知覚の邪魔にはならず、その手助けをしてくれる。それは読者や観衆、あるいは聴衆に芸術作品に対する確定的な判断をさせたり、明確な態度をとらせたりすることはない。しかし芸術作品を「解説する」ようにして、理解を容易にしてくれる。

実際の知識が必要とされるのは、芸術作品の知見が歴史を見通した上で行われたり、過去の再現によって浸透したりするための目的がある。なぜなら遺物に対する美的な態度は、常に歴史的なそれでもあるからだ。私たちの前に現

代の記念物があるとしても、現代もまた歴史のなかのある一瞬間である。私たちはそれが現代に創られたことを知っていなければいけない。ある遺物が古代エジプトの時代に創られたということを知っていれば、このことは遺物に対する歴史的な態度をつくりだし、遺物を感じ受けるのを助けてくれる。古代エジプト芸術をもっと敏感に感受するためには、いずれかの遺物が古代エジプトの歴史のどの時期に創造されたのかというさらなる知識が必要とされる。

知識は私たちにドアを開けてくれるが、そこには自分で入っていかなければならない。特に、些細なことの重要性を強調しておきたい。時には些細なことが要点の理解を可能にしてくれる。色々なものが何のために書かれたり、描かれたりしたのか知ることは、なんと大事なことだろうか！



それほど昔のことではないが、エルミタージュで、18世紀末から19世紀初頭のロシアで舞台装置家として、また庭園の建築技師として活躍していたパブロフスク・ピエトロ・ゴンザーボの展覧会があった。主として彼の建築のテーマのデッサンは遠近法の構成の美しさに関してめざましいものがある。モデルの中の水平なラインを強調したりして、彼は自分の技量をひけらかしてさえいる。しかしデッサンにおいてはそのラインは地平線のところに集まっており、まるで遠近法の構成はこうあるべきであるかのようなのである。モデルに水平なラインがなんとたくさんあることだろう！軒やら屋根やら。

ふつうよりわずかに太い水平なラインが至るところにあって、若干の線は「必要」の境界、実物の境界を越えたところまでのびている。

しかしもっと驚くべきことがある。ゴンザーボの不思議な遠近法を眺める視点が常に下のほうから見たものであるということだ。どうしてだろう。観衆がまっすぐ目の前でデッサンを見ているようではないか。これは劇場のインテリアデザイナーのスケッチ、舞台装置家のデッサンである。劇場の観客席（いちばん「大切な」来訪者の席である）は下のほうにあり、ゴンザーボは一階席に座っている観客のために構成を計算しているのである。このことをわかっていなければいけない。

芸術を理解するためには常に、創作の状況や目的、芸術家の人物像やその時代を知らなければならない。芸術を素

手でつかまえることはできない。観衆や聴衆、読者は「武器を持って」いなければならない。知識や情報で武装しなければならない。だから芸術や文学や音楽の作品の序論や解説には大きな意味がある。

知識を蓄えてください。知識は力である、とは理由があってこう言われているのだ。「知識は力なり」という雑誌さえある。しかしこれは学問における力だけではなく、芸術における力でもある。無力な者にとって芸術は近づきがたいものだ。

知識という武器は平和的な武器である。



民衆芸術を徹底的に理解し、それを「原始的だ」と思わずに見ることができるなら、民衆芸術はあらゆる芸術の理

解のための出発点になるかもしれない。つまり、ある種の喜びや独自の価値、芸術の知覚を妨げる様々な欲望（まず絶対の「類似性」に対する欲求のようなもの）の理解である。民衆の創作は芸術の約束ごとを理解することを教えてくれる。なぜだろうか。いったいどうして民衆芸術がこのような出発点、最高の師の役目をしているのか。それは、民衆芸術のなかに千年もの経験が実現されているからだ。「文化的な」人と「非文化的な」人という分類は、しばしば極度のうぬぼれや「都会人」という自分の過大評価によって行われる。農民は自身の複雑な文化を有している。それは、驚くべき民間伝承（深遠な内容で、伝統的なロシアの農民の歌を考えてみてください）や、民衆芸術、北部の民族の木造建築の中だけではなく、複雑な生活様式、農民の礼儀のきまり、とても美しいロシアの婚礼における客のもてなし、農民の一般家庭の食事、複雑な労働の慣習や労働の祝宴の中にも現れる。

習わしとはやたらと生ずるものだ。それは数世紀にわたる合理性に関する淘汰の結果でもある。民衆芸術とは美に関する淘汰でもある。伝統的なかたちがいつも最良であり、それでなければならないというわけではない。新しさや芸術的な発見（伝統的なかたちもかつては発見であった）を志さなければならない。しかし新しいものは、古いものや蓄積されたものを排除するのではなく、昔や伝統を考慮に入れながら、結果として生じるものでなければならない。

民衆芸術は彫刻の理解のために多くのことを与えてくれ

る。素材の感じや重々しさ、密度、形の美しさを農村の木製の入れ物にはっきりと見ることができる。それは彫刻をほどこした木製の塩入れや杓子で、祭日の農村のテーブルの上に置かれているものである。ボグスラフスカヤは自分の著作「北の文化財」の中で、鴨の形に作られている杓子や塩入れについて、こう書いている。「威風堂々と穏やかに泳いでいる、誇らしげな鳥の姿がテーブルを飾り、食卓を民衆の言い伝えの詩歌で取り巻いている。この完全な形は何世代もの時をかけて生まれ、彫刻の芸術的な形と、使いやすく容量の大きい入れ物とを共存させている。なめらかな輪郭、シルエットの波状のラインはまるで水の動きのゆっくりとしたリズムをそれ自身の中に吸い込んでしまったかのようなのだ。実際にあるモデルが日常生活の品にインスピレーションを与え、約束ごとのような形に納得のゆく表現力与えている。これはすでに遠い昔にロシアの民族特有の食器の形として確立されている」。



民衆芸術の作品のかたちは、時を経るごとに芸術的にみがきあげられたかたちである。同じように、北部の農村の農家の屋根についている「コニョーク」（屋根の棟木の端についている木製の屋根飾り。馬の首の形をしているところからこう呼ばれる）もみがきかけられてきた。ロシアの作家であり、私たちの同時代人であるフョードル・アブラーモフはちゃんとした理由があってこの「コニョーク」を自分の作品「コーニ」のシンボルにした。

この「コーニ」とは何であろうか。農村の農家の屋根についているもので、屋根ふき用の板の端を押さえつけ、安定性を与え、巨大な重い丸太がのるようにするためにある。この丸太の根元はどっしりとしていて、そこに馬の頭と力強い胸が斧で彫られている。この馬は破風の上に突き出ていて、まるで農家の家庭生活のシンボルのようである。それは何という絶妙な形をしていることか！同時にそこにはその馬ができていた素材、長い歳月をかけてゆっくりと成長した木のパワー、馬の偉大さ、家に対してだけでなく周りの空間に対する威力が感じられる。有名なイギリスの彫刻家であるヘンリー・ムールはこのロシアの馬から彫塑の力を学んでいたかのようだ。ムールは力強く、上半身を少し起こして横たわっている彫像をばらばらにしていた。なぜか。そうすることによって彼は彫像の壮大さやパワー、重々しさを強調しているのだ。同じことがロシアの屋根飾りの馬にも生じている。丸太には深い割れ目ができていた。その割れ目は斧を入れるずっと以前からできてい

たものだが、このことが北方の彫刻家たちを動揺させることはなかった。彼らはこの「材料の切断」に慣れてしまっていた。というのは、農家小屋の丸太も、農村にある手すりを支える小柱の彫刻も割れ目なしですますことはできなかったからだ。このように、民衆の彫刻は現代の彫刻の複雑な美学の原理を教えてくれる。

民衆芸術は、私たちに教えてくれるだけでなく、多くの現代の芸術作品の基礎となっている。

マルク・シャガールは創作の初期のころ、白ロシアの民衆芸術から出発した。作品の色彩の原則や方法、作品の快活な内容から歩みはじめたのだ。作品の中では喜びは人間の飛行の中に表現され、家屋はおもちゃのように見え、憧れは現実とひとつになっている。彼の鮮やかな色とりどりの絵の中では、赤や空色など民衆に愛されている色合いが圧倒的に多く、馬や牛は悲しげな人間のような目で観衆を見つめている。西洋での長い生活でさえ、彼の芸術をこの白ロシアの起源から引き離すことはできなかった。

ビャトカ河岸の粘土のおもちゃや北部の農村の大工のおもちゃは、多くの複雑な絵画や彫刻作品の解釈を教えてくれる。

有名なフランスの建築家であるコルビュジエは、彼自身の告白によれば、建築方法の多くをオフリドの町の民衆建築様式のやり方に学んでいる。特に彼はそこから独自の階の設計方法を得た。いちばん上の階が下の階に対してやや横向きに作られている。これはその階の窓から通りや山や湖のすばらしい眺めが開けるようにするためである。

芸術作品にアプローチする視点というのは時として明らかに不十分である。ここで言う「不十分」とは。肖像画というものは単にモデルに「似ている」か「似ていない」かということしか考えられていない。もし似ていなければ、一般に言う肖像画ではないが、もしかしたらすごい芸術作品かもしれない。それに単に「似ている」だけならこれで十分だろうか。それなら芸術写真の中に類似性を求めるのがいちばよい。そこには類似性があるだけではない。しわも吹き出物もあれば、身分証明書にもなるだろう。

肖像画が芸術作品であるためには、単なる類似性以外に何が必要だろうか。まず類似性とは様々な深層の類似、精神的な核への浸透である。これは撮影にふさわしい瞬間をのがすまいと一生懸命になっている写真撮影のようなものだ。撮影を待っている間の緊張が顔に現れないように、特徴ある表情が出るように、楽な姿勢で個性があって、その人らしさが出るように。肖像画や写真が芸術作品になるかどうか、多くのことはそのような「本質的な類似性」に左右される。しかし問題は他の美しさ、色彩やライン、構成の美しさの中にもある。もし、肖像画自体の美しさを、その中に描かれた人の美しさと同一視してしまうようになってしまったら。考えてみてください。肖像画の絵画的もしくは線画的な美しさや、描かれたモデルの美しさからの独立がありえなくなってしまうということを。そうなればもう肖像画を理解できなくなってしまうだろう。

肖像画について言われていることは風景画にもあてはまる。これも「肖像画」であって、自然のポートレートであ

る。ここでも類似性は必要だが、もっと大きい程度に、絵画の美しさや、その場所の「土地の霊」の「心」を理解し表現する能力が必要である。しかし画家は自然を強く「修正」して描くことができる。あるがままの自然ではなく、重大な根拠に基づいて、描きたいと感じるままに描くのである。しかし画家がただ絵を創作するのではなく、自然や町の中のある場所を描くことを目的とし、自分の絵の中にある場所のある特徴を与えるならば、類似の欠如は大きな欠陥となる。

それでは、画家が単なる風景ではなく春の色調だけを描こうとしているなら。若い白樺の緑や白樺の樹皮の色、春の空の色、これらを春のトーンの美しさが最大限に現れるように気ままだに並べようとするなら。そのような試みには寛大に接して、画家がしたがっていないことを要求してはならない。



さらに続けて、ある画家を思い浮かべてみよう。その画家は、類似性というものは全く追求せずに、色合いや構成、ラインの組み合わせというだけの手段で自分の何かを表現しようとしているなら。ただ何らかの気分や自分の世界の解釈を表現しようとしているとしたらどうであろうか。このような試みを追い払ってしまう前に、慎重に考えてみなければならない。私たちは、すぐには理解できないことすべてをはねつけたり、拒否したりする必要があるわけではない。私たちはあまりにたくさんの間違いを犯している。音楽を学ばずにクラシック音楽を理解することはできないではないか。

本格的な絵画がわかるためには、勉強しなければならないのである。